



# 芸術鑑賞 身体で感じて表現すること — パントマイム

広島工業大学附属広島高等学校・附属中学校  
教諭 長松 孝明

芸術鑑賞プログラムの企画には校内の教育開発部が中心となっており、今回その運営スタッフの一員としてかかわった中から、この出会いに恵まれた企画について書きたい。

## 舞台設定

以前本校が宮島を舞台に琵琶などの古典プログラムを実施した際にもコーディネートを担当され、歴史ガイドでも知られた梶本晃司さんが今回のプロデュース役となられ、打ち合わせが進んでいった。

ホールコンサートでのようなステージと客席の距離感をなくし、極力演じる側と観る側とが一体感を持てるスペースづくりを考えた。本校体育館のフロアを活用し、できるだけ小さな集団で観られるように、演じられる清水きよしさんには無理をお願いして、2学年ごとの連続3ステージという設定とした。また、あえて前の舞台は使わず、フロアに仮舞台を設置してそれを扇形に囲むようにして座り込んでの鑑賞スタイルにすることにした。この舞台設定のおかげで暑さという課題はあるものの、それはなかなか素敵に生徒の心に響くことになる。

## 準備ホームルーム

数日後に本番の舞台を控え、全校で準備のホームルームの時間を持った。まずはマイミストの清水きよしさんをご紹介します。「幻の蝶を追って」と題したご本人のインタビュー文を読んだ。西洋的な芸能であるパントマイムを「日本人として演じられるように正装し

て畑仕事をするような違和感を越える営み」をされてきたことを学んだ。その後は私達がパントマイムでまずイメージする「壁」のワークから始まって「ロープ」「棒」「ロボット」「階段」と初歩のパントマイムの動きをする時のポイントや基本要素を学んだ。クラスによっては実際に身体を動かして表現してみることに挑戦した。中学教務室にて「階段」の実演を披露された先生もいらしたと聞く。

舞台前日には生徒達20数名がお手伝いをしてピアノの運搬・舞台の設営にあたり、体育館フロアに落ち着いたシックな空間が生まれた。リハーサルにこられた清水きよしさんの空間を操るような軽々とした身のこなし、そしてピアノで舞台を盛り上げる延原祐さんのジャズ風の透き通った魅力的なピアノの音色に翌日への期待が高まった。



## さて、当日

朝9時からの中1・2年の第1ステージから当日の公演が始まった。延原さんのピアノにみんなの思いが集中する中、あたりの空気を引きつけつつ後ろ側からふわりふわりと清水さんが登場してこられた。はじめの「風船」のマイムの時、ピアノが途切れた静寂

の中でも、300名あまりのみな視線の先にはひとつの見えない風船がふわふわと浮かんでいた。

10メートル四方もない舞台の上で3回のステージの間、清水さんは軽々と走り、少年になり、翼を羽ばたかせて飛び、飛行機を飛ばした。暗幕をかけただけのステージに立つ清水さんの手と身体と表情と視線から、みんなの目の前には大きな壁や、秋の夕陽や柿の木が現れた。一人芝居を越えた一人芝居であった。

生徒参加のワークショップについては、特に高校生となると果たして手が挙がるのかという私共スタッフの事前の心配はまったくの杞憂であった。午後にはさすがに少々暑くなったが、最後の高II・III年のステージでも多くの高校生達が舞台上で果敢にマイムに挑戦してくれた。

以下、生徒達の感想を紹介したい。

## パントマイムを観て(生徒の感想)

清水きよしさんの公演を見ていて気づいたことがある。1つは表現の力、顔の表現や体の表現などの表現の仕方はその場の空気や雰囲気によってちがう。それをどううまくこなすかというのが、パントマイムの大切な要素の1つ。

2つ目は、その状況にあわせるように流れる音楽。これは清水さんのパントマイムを延原さんが音楽でバックアップしている。これはとても大切なことだと思う。音楽が流れることによってパントマイムに必要な表現力を

ももっとも引き立てて、よりすばらしいパントマイムとなる。こういうことがよくわかった。(中1生徒)

最初はパントマイムなんてと思っていた。けど、延原さんの演奏で登場してきた清水さんのパントマイムを見て、ああ面白いのだなあと思った。言葉がないから顔を見ると何となくこの時はあんなことを言うのかなあとか、もしかしてこんなことをしているのかなあとか勝手に想像できる。でも、延原さんのピアノ演奏で本当はあんなことを言っているのかも確信に近いものを抱いたりする。言葉がなくても、言いたいことは表せるものなのだなあと思った。(中2生徒)

体で表現することが難しいから言葉などができたのだとは思っていましたが、その難技をパントマイムはやってみせるのだとすごく驚きました。風船がふくらむさまや、壁をのりこえるさまなど、とても細部にわたって現実味のある動きでした。舞台上だけの切りとられて浮かび上がった空間とは違って、自然にそこにあるような一体の空間の中でパントマイムは「やってみせる」ではなくて「やって魅せる」ものなのだろうなあと思いました。(中3生徒)

パントマイムだからできる空間をしっかりと使ったアートにとっても感動した。清水さんが走ると後ろへ流れていく風や風景が見えて、柿をもぐ動作から柿が見えたり、風船を膨らませ

ると風船が見えたり、紙飛行機を本当に飛ばしているかのように見えて、清水さんの動作すべてが本当に見えた気がする。それに柿と赤とんぼでは夕暮れの背景が見えて清水さんがこどもに変身したように見えて本当に感動した。(高1生徒)

足音がなかった。ピアノ以外の音はまったくといってよいほどなかった。無音の世界で別に言葉がなくても、その動きを見れば万国共通どこでも楽しめる。ワールドパントマイムだ。そして、清水さんの表情がものすごく豊かだった。柿をわけてもらった時のうれしそうな表情などとても楽しむことができました。(高2生徒)

私は以前からパントマイムには興味があった。そのきっかけは映画「天井桟敷の人々」だったのだが、その中にこういう台詞があった。「しーっ、静

かにしろ。無言劇が聞こえん」。私はこの台詞を、ただ単にちょっとしたおもしろい言葉遊びのようなものとして受け取っていたが、非常に印象的だったのを覚えている。そして今日、その本当の意味が少しわかった気がした。演じる側も観る側も一体となったその沈黙の中に私は台詞や効果音を聞いた気がした。沈黙の中で会場が一体となること。これこそがパントマイムの中で一番重要であり、そしてパントマイムの醍醐味であると思う。

(高3生徒)

延原さんのピアノの音が響く中、各ステージ300名から400名あまりの生徒達がじっと集中して清水さんの手の先、視線の先に繰り広げられる世界に入り込んでいった。少年から大人、空飛ぶ翼へと変幻自在のマイムに情感あふれる豊かなひとときを過ごすことができた。

